

リスクとリターン (投資の意味を考える)

最近、投資の意味を考えさせる出来事が相次いだ。KKC、オレンジ共済、そして和牛商法。この低金利時代に「高利回り」を謳い文句に投資家を募集する。そして現実には多額の資金が集まり、問題が発生する。当然乍ら高利回りの約束は反古にされ、投資した元本すら返ってこない。マスコミに大々的に取上げられ、TVにモザイク模様の被害者が登場し「私は騙された」と泣きを入れ、識者が尤もらしい解説をする。

しかし、こんな画面は昔から何度も繰り返されてきた。低金利時代特有の事件ではなく、いつの時代でも起こる事件の一つバリエーションに過ぎない。時を移し、形を変え、姿を変え、次々と起こる出来事の一例だ。

今回立て続けに起こった「高利商法」は、しかしただ単に「悪徳商人と騙された馬鹿な奴」として片づけてしまうには惜しい材料で、改めてリスクとリターンについて考えてみた。

私達の現在の経済システムである資本主義は、その発展段階や地域性で定義の仕方が違うかもしれないが、それがリスクの上に成り立つシステムであることは明瞭である。

私達が受取る金利や投資のリターンは、全てリスクの分散の見返りである。事業家は、常に失敗というリスクを背負っているからこそ成功の報酬も大きい。リスクのない所にリターンはない、それがこの経済の基本ルールである。

しかし経済の成長と富の集積は、私達からリスクを負う感覚や覚悟をそいできた。政府や官僚が保護という網をはりめぐらしたこと自体は、私達の社会からリスクを減らす作用をするもので、責めるべきものではない。そもそも近代社会は、社会のもつリスクを広く薄く分散し、軽減する仕組みを作ってきたからだ。

だがリスク感覚の乏しくなった人間は、リスクに対して無防備になりやすい。リスクの覚悟なしにリターンを求める行動になりがちである。

今回の一連の「被害者」達は、リスクを認識していたのだろうか。リスクなしにリターンが望めると思ったのだろうか。甚だ疑問である。

私は、これらの「被害者」が特別馬鹿だったとは思わない。リスクが分散され軽減された社会では、この種の「被害者」はそこらじゅうに存在してしまうからだ。そしてその根本に、リスクとリターンが噛み合わない現象が次々と発生する社会構造がある。

例えば卑近な例でいえば銀行預金それぞれに当る。「銀行不倒神話」が崩壊したといっても、まだまだ沢山の人が銀行に定期預金をしている。しかし、1年という期間「投資」して0.3%程度リターンのある定期預金という商品が、リスクに見合ったリターンのある商品なのか検討して預金(投資)している人がどれだけいるのだろうか。恐らく殆どいないに違いない。ただ過去からの習慣で「投資」という感覚ではなく「預金」という感覚でやっているに違いない。

無理からぬことだが、現状では政府(預金保険機構)の保障がなければ、定期預金という商品はリスクとリターンがミスマッチを起こしている典型的な商品である。

多くの人は銀行の財務内容などに興味はないだろうが、銀行の財務は意外に脆い。銀行の自己資本は総資本に対してせいぜい5%程度に過ぎず、中小企業の自己資本比率より低い。1兆円規模の銀行は、不良貸出等で500億円の自己資本を食いつぶせばたちまち債務超過に陥る。そしてそうした銀行が出てきて破綻したが、そんな銀行も破綻直前まで他の銀行と同じ預金利率で資金を集めていた。だが、その事の是非はそれほど問われなかった

KKCやオレンジ共済の被害者を笑えるようなリスク感覚を持った人はそれほどいないのではないだろうか。銀行預金も2001年からペイオフが実施されるというが、銀行に預金する人達にその覚悟があるのだろうか。

「投資とはリスクを取ってリターンを求める行動である」という基本に立ち返って、リスク感覚を磨こうと思う今日この頃である。

§お知らせ§

帝国データバンクは今日より、パソコン通信「ニフティサーブ」で企業倒産情報を流し始めました。同社が発行する「帝国ニュース」に掲載されるものを低価格でネット上に発信するものです。データは毎日更新され、ほぼ24時間閲覧可能です。GO「TDBC」です。